



1949-1955

# 準々決勝進出、強豪芦屋高校に善戦。 一丸となり、相手ゴールへ突進。



津川・岩間・田淵・山田・森・佃・千原・筒井・久山

## 思い出の一戦

六甲を卒業してはや38年。在学中の校長武宮隼人神父の薫陶を強烈に受けたあの6年間の青春時代は、40年近く経った今も私の体の中に脈々と生き続けています。

私の六甲時代の部活の思い出となりますと、私は中学時代、器械体操部に所属し、市の大会で団体優勝、個人3位、県大会では団体優勝など、六甲の運動部としては極めて良好な成績を残した事がよみがえります。しかし決して私自身が熱心な部員ではなく、かつ器械体操がボールゲームのように団体

競技でエキサイティングな面が強くないことにあきたらなくて感じて、中3の終わり頃から、サッカーを遊びでやり始めました。当時、私の尊敬する親友の山田君（後にサッカー部の主将）から、お前も是非サッカーをやれと勧められ、何のためらいもなくサッカー部に入り、以後はすっかりサッカーの虫となり、学業をおろそかにしてもサッカーにのめり込んだものでした。自慢ではありませんが、当時は早くレギュラー選手になるため、後に六甲のサッカー部の監督になる同期の佃君より私の方がはるかに練習熱心だったと思います。以上のような経緯で、六甲時代は3年間のサッカー部活動でしたが、

今も充実感をもってこの3年間のことを思い出す事が出来ます。

さて、この3年間の中で、最も印象的かつ中身の濃い対外試合の一つを以下に紹介しましょう。かなり古い事なので内容が独りよがりであり少し記憶ちがいがあっても知れませんが御容赦願いたい。

時は昭和29年秋の県大会。当時の六甲サッカー部はそれ程強いチームではなく、常に中の上ぐらいの成績をおさめていましたが、この秋の大会では（当時は、高3の選手も出場可能だった）、我々高3組、山田主将と私、そして高2組、茶屋、黒田が燃えており、1、2回戦を軽く突破、ベスト8に勝



ち進みました。この時代の兵庫県**の強豪チームは、伝統の神戸高校(旧一中)名門の関学高校、硬派の県立工業高校に加え、当時の兵庫県のスーパースター李選手がいる芦屋高校などがひしめいていました。我々は準々決勝でこの強豪芦屋高校と、西宮球場第2グラウンドで対戦しました。久しぶりの準々決勝進出で、先輩も何名か試合を見に来られました。当日はあいにくキーパーの長尾君(?)が風邪で欠場となり、代理にキーパーの経験がほとんどないX君(彼の名譽のために名をふせる)にやってもらうことになりました。フォワードには名ウイングの黒田君、センターにエースの茶屋君(いずれも13期生)、そしてハーフバックに主将で大黒柱の山田君(センター)と私(ライト)という布陣で対戦(他のポジションの人名は記憶が不確かでごめんさい)。特に山田君と私は高3で高校最後の大会であった事もあり、この試合には何としても勝ちたいという執念に燃えていました。試合が始まると案の定、芦屋高校はセンターフォワードの李選手にボールを集め中央突破をねらって来ました。李選手のボールさばきは見事なもので、まるでボールが足とゴムヒモで結ばれているようにコントロールされ、彼をマークするのが大変でした。しかし、山田君と私が彼の動きを徹底的にマークし、彼にボールがわたらないように封じたため、彼自身がシュートを放つ機会はほとんどありませんでした。ところが思**

わぬ(或は予想していた)おとし穴が待っていました。それはうちのキーパーがにわか仕立てであり(これは本人の責任ではない)、敵のイージーシュートをハングルして、それがゴールインしてしまったのです。しかし、フォワードが頑張り茶屋君がすぐ1点を取りかえし、1-1の同点に追いつきました。その後前半は両チームとも1点ずつ加え、互角の形で前半(2-2)を終えました。

後半に入ると芦屋は李選手をセンターフォワードからハーフバックに下げもっぱらリベロの形でチャンスメーカーの役に徹しさせて来ました。これで、芦屋のボールを支配する機会が多くなり、当方はもっぱら守勢に立たされ、代理キーパーがヒヤリとする場面がふえて来ました。そしてとうとうイージーシュートを又もやキャッチ出来ず、3点目を献上してしまいました。これで我が方はガックリ来て、タテ続けにもう1点とられ、とうとう4-2となってしまうました。

しかしここから六甲の逆襲が始まったのです。山田主将と私は全員にまだまだチャンスはある、最後まであきらめないで頑張ろうと激励しました。それに応えて、黒田、茶屋が発奮し、茶屋が中央から持ち込んでシュートを決め、1点差につめました。この時残り時間は5分位しかなかったと思いますが、試合は俄然盛り上がり、当校の応援団の声も一段と高くなり、選手は大ハッスル。私も「あと1点取ろう」

と叫びながら猛反撃に出ました。さすがの芦屋高校チームも守勢一方に立たされ、我が方が押しに押したゲーム展開となりましたが、最後の1点がとれず、ついに試合終了のホイッスルが鳴ってしまいました。

こんなに試合時間が短く感じられたのはそれまでにない事でした。ああやっぱり念願のベスト4進出はダメだったのかという惜しい思いと、精一ぱい戦ったすがすがしい気分と、そしてこれで高校のサッカー生活も終わったのだなあという一抹の淋しさが入り混じった複雑な気持ちで試合終了の挨拶を交わしました。試合を見に来て下さった西沢先輩(11期生)に「君達は、キーパーが素人で、芦屋によくここまで善戦した」とねぎらいの言葉をかけて頂き、あらためて、今日の一戦は最後まで充実した、悔いのない戦いぶりだったのだなあという満足感をおぼえました。

私事ですが、この1ヶ月後の集団検診で私は肺浸潤と判明し、しばらく学校も休み、サッカーとも数年縁を切ることになるのですが、それは別として、私にとって、この試合は本当に思い出に残るそして充実感をもって思い出せる一戦でした。

あらためて、当時の同輩、後輩そしてわざわざ観戦に来られた諸先輩に御礼申し上げます。

[森 茂充]